

# Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.3 March 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



3

## CONTENTS

- ・巻頭言  
ブラジルの天理教④  
／永尾 教昭 ..... 1
- ・コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ  
関係試論（最終回）  
エピソード：コンゴ川のほとりで  
／森 洋明 ..... 2
- ・宗教伝統における聖典の意味構造（最終回）  
聖典の意味構造とその理解へ  
／澤井 義次 ..... 3
- ・台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民  
族誌（6）  
天理教教理における海外伝道について（3）  
／山西 弘朗 ..... 4
- ・イスラームから見た世界（19）  
イスラームから見た死①  
／澤井 真 ..... 5
- ・天理参考館から（27）  
お洒落と髪飾り  
／幡鎌 真理 ..... 6
- ・コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価  
値観と教への伝播—（20）  
6. コロンビアの日常1  
／清水 直太郎 ..... 7
- ・ニューヨーク通信（12）  
品川幹雄氏と文化協会  
／福井 陽一 ..... 8
- ・思索・試案・私案  
「いのち」をめぐって  
／堀内 みどり ..... 9
- ・2021 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に  
学ぶ（7）  
第5講：123「人がめどか」  
／島田 勝巳 ..... 10
- ・図書紹介（130）  
ウィルフレッド・キャントウェル・スミ  
ス著『宗教の意味と終極』（国書刊行会、  
2021年）と『世界神学をめざして』（明  
石書店、2020年）  
／澤井 義次 ..... 11
- ・おやさと研究所ニュース ..... 12  
第345回研究報告会／2021年度公開教学  
講座のご案内

## 巻頭言

### ブラジルの天理教④

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

前号で参照した山田政信著『新宗教の  
ブラジル伝道』（おやさと研究所、2018年）  
を基にもう少し、ブラジルにおける日系  
宗教の実態を見ていきたい。

特にブラジルで教勢を伸ばしている教団  
として生長の家（信者240万人）、PL教団  
（60万人）が挙げられる。天理教と違い、  
それらは日系人の枠を超えてブラジル人の  
間に浸透している。

そもそも天理教は同地に渡った日系移  
民の間に信仰を広めていった。それに比べ  
て、彼らは非日系人に焦点を当てて布教  
していった。さらに、両者とも組織的に  
布教を進めた。すでに述べたように、天  
理教の場合、日本国内であっても教団と  
して組織的に布教した例はほとんどない。  
どちらかと言えば一人の布教師が未踏の  
地に入って布教するという、いわゆる「単  
独布教」や商人が行商しながら信仰を広め  
ていったという形が多い。海外も言わば同  
様であり、ヨーロッパ出張所などの例外  
を除いて、**教団**が、ある地域の教勢進展  
を意図して信者がいないところに布教師  
を派遣し拠点を設置した例はない<sup>(1)</sup>。ブラ  
ジルの場合、例えば南海大教会が布教師  
を派遣し布教を支援した。しかし、他の  
教会から派遣された布教師も含めて、ブ  
ラジル全体を教団として統括し布教線を  
伸ばしていったわけではない。この点に  
ついては今後、海外各地で本部が設置し  
た拠点などを中心に組織的に布教し、か  
つ体系的に教理を習得するようなシステ  
ムの構築を考えていくべきだろう。

さらに同書によれば、生長の家では教  
理勉強会などの集会は信者たちが自主的  
に運営しているという。そうすると当然、  
そこには日本（系）人は介在しない。一方、  
天理教の場合、信者の教会に対する帰属  
意識が非常に強い。ちなみに、例えば本  
部で開催される、毎年20万人が参加する  
「こどもおぢばがえり」などの行事が可能  
になるのもそれゆえだろう。そのスタッ

フたちは各教会から動員され、それぞれ  
喜んで「ひのきしん」と言われる奉仕活  
動をする。

このように帰属意識が強いので、国内、  
海外を問わず信者たちは、自分の所属す  
る教会の会長や役員の方々の指導の下、教会単  
位で活動を行うという形が多い。そして  
前号で見たようにブラジルの教会長、布  
教所長はほとんどが日本（系）人である。  
どうしても天理教と日本の伝統が混淆し  
た空気が流れやすいのではないかと。この  
点も考えていかねばならないだろう。

山田は同書の中で、信者を回心型、つ  
まりカトリックの信仰を捨ててその宗教  
に入信するケースと重複型、カトリック  
も信仰しながら他も信仰するケースに分  
けている。それを生長の家、PL教団、天  
理教と比較すると、回心型は天理教の割  
合が一番高く、生長の家が一番低い。一  
方重複型は生長の家が最も高く、天理教  
とPL教団がほぼ同じだ。つまり生長の家  
の場合、カトリックから同教に改宗する  
というよりも、カトリックを信じながら  
同時に生長の家も信仰するのである。こ  
れも現地人信者が多い一つの理由だろう。

ここが、天理教の異文化圏伝道全般に  
とって非常に重要で難しい問題だろう。最  
も難しい問題と言っても良いかもしれない。  
ブラジルでカトリックを捨てるという  
ことは、国の風俗・習慣を捨てる、つまり  
本人にとれば国民としてのアイデンティ  
ティの喪失にもなりかねない。同様の  
問題は別の地域でも起きる。フランス人  
の天理教信者家庭でもクリスマスは祝  
うし、ある東南アジアの信者宅には仏像が  
祀ってあった。筆者は、程度にもよるが  
まず重複型から入り、徐々に回心型にな  
っていくより他にないのではないかと思う。

[註]

(1) 例外としてヨーロッパ出張所以外に  
コンゴブラザビル教会、ネパール連  
絡所が挙げられる。